

東武亀戸線の沿線歩いて見る その1 <亀戸篇>

【東武亀戸線とは】

総武線の亀戸駅から曳舟までの3.4Kmを走るのが、都心のローカル線「東武亀戸線」。

明治32年(1899年)、東武鉄道の最初の営業区間として北千住・久喜間が開通した。当初は業平橋を起点とする計画で、さらに越中島までの延伸を企てていたが、認可が下りるのに手間取り、北千住・久喜間の開通が先になった。

明治35年(1902年)に北千住・吾妻橋が開通し、明治37年(1904年)に亀戸・曳舟間が開通。

これにより総武鉄道への乗入れを行なって両国橋(現在の両国)まで接続されるとともに、吾妻橋・曳舟間が廃止となった。ところが、総武鉄道が国有化されて国鉄となったことで、亀戸・両国橋間の乗入れはなくなり、再び東武線のターミナル駅は吾妻橋に戻った。

などなど曲折を経て、東武線は起点を浅草とし、亀戸・曳舟間を結ぶ亀戸線は支線となった。

亀戸駅を出て、総武快速線の北側を500mほど進んだのち左にカーブして、やがて北進するようになると、最初の停車駅である亀戸水神駅に入る。車内アナウンスを聴いていてわかったことだが、この路線は「曳舟行が上り」で、「亀戸行が下り」。

車内は買物や小用で移動する近所の人ばかりで、「下駄ばき」の都電のような親近感が漂う。だから、スピードを上げる必要がないのかのんびりした速度で走って行く。車窓の景色のゆっくりした流れ去り方も、車内の乗客同士の会話の声も、電車の響きと一体となって心地よい空気が漂う。

【亀戸とは】

古代の利根川は東京湾に河口があり、運ばれた土砂が堆積して島(洲)が形成された。島の形が亀に似ていることから「亀島」と呼ばれた。その後も土砂の堆積が進み、やがて陸続きの地形となり、亀村という村落ができた。また村内に亀ヶ井という古い井戸があったことによるという説もあり、それらが混然一体となり「亀井戸」という地名が生まれたと言われている。

しかし、これらの言い伝えも時代が明確に示されてはおらず、定かではないようであるが、江戸時代の1600年代には存在していた地名らしい。

「亀戸」は、竪川堀の北側で北十間川・横十間川・旧中川に囲まれた地域で、江東区に属する。

現在の地図から「亀の形」を想起するのは難しい。

北十間川の北側は墨田区立花(昔の吾嬬)で、その北が向島になる。川の流れや切り拓かれた水路の存在が「地域」を形作るのに大きく影響してきたことが感じられる。

【法徳寺】

亀戸駅を北口に出て、線路に沿って千葉方面へ歩く。何やら落ち着きのないゴチャゴチャした歓楽街を横目に見ながら進むと、低層のマンションや一戸建ての住居が混在するようになる。

マンションの名前を拾い読みして行くと、どこの国へ来たのかわからなくなってくる。

ルーブル亀戸というマンションの角を北に入ると民家の隣に何気なく建つ寺が目に入ってきた。

寺の名は浄土真宗本願寺派の法徳寺。門口に親鸞聖人の立像が建っており、前庭もなくいきなり本堂になるので気軽に入るのは悪いような気がする。創建は昭和6年(1931年)。寺の由緒・歴史など

の説明板はなく詳細はわからない。人気は感じられないので、ちょっと覗いただけで通過。

昭和6年創建ということは、関東大震災（大正12年）からの復興の中で創建（再建？）されたのか。

【亀戸水神宮】

法徳寺の前を北に進むと、道は少しずつ右にカーブして、北北東に向かうようになり、亀戸水神宮の脇に飛び出す。亀戸水神宮は、室町幕府12代将軍足利義晴の時代（1500年代半ば）の創建と言われている。水害防止を祈願して、吉野の丹生川上神社を勧請して建てられた。境内に建つ石塔には「水神宮」とだけ刻まれていた。祭神は弥都波能売神（みずはのめのかみ）。

昭和20年3月の大空襲で大きな被害を受けて、昭和35年（1960年）に再建された。

【天神様と水神様】

地元在住ではない人に「亀戸」と言うと、亀戸水神よりも亀戸天神を想起する人が多い。梅や藤・菊などで有名な観光地だったことによると思われる。

亀戸天神は、水神から西へ 1Km余の所にある。創建は1661年（寛文元年）で、天神信仰を全国に広めんと各地を巡った菅原道真の末裔によるもの。

東武線の亀戸水神駅の大きな看板に、「亀戸天神へおいでの方は、最寄り駅はここではありません」と書かれているのが面白い。

【浄心寺】

もう慣れた東武亀戸線、沿線住民のような親近感で乗り込めるようになってきた。

亀戸水神前の二股を右俣（北）に進路をとり、亀戸梅屋敷と称する施設を覗いた後で蔵前橋通りから路地に入り浄心寺へ。寺の正式名称は浄土宗鏡智山寶蔵院浄心寺。

六地藏と赤門が出迎えてくれた。創立は元和元年（1615年）。墓地の片隅に関東大震災の直後に発生した虐殺事件（通称：亀戸事件）の犠牲者を慰霊する墓碑が建っていた。

大震災により治安が悪化しているとして、以前から労働争議で敵対関係にあった社会主義者10名が亀戸警察署に捕えられた。10名は習志野の第13連隊に引き渡された末、亀戸警察署内及び荒川放水路で刺殺された。「朝鮮人による暴動」などの流言が引金となって各地で発生した恐ろしい事件のひとつに数えられる。

【寶蓮寺】

浄心寺から蔵前橋通りを渡って少しばかり東進すると、富豪の豪邸のような門構えの寶蓮寺がある。

真言宗智山派東林山華蔵院寶蓮寺が正式な名称である。

嘉元元年（1303年）創建。本尊は虚空蔵菩薩で（行基の作と言われている）、江戸三大虚空蔵尊のひとつに数えられていた。寺は東京大空襲で焼失したが、昭和39年（1964年）に再建された。

【亀戸石井神社】

寶蓮寺の一本北側の路地に亀戸石井神社がある。

本殿の建て替え工事が始まるとのことでもロープが張られて立入禁止になっていた。境内に踏み入ることはできなかったの、入口に建つ説明看板を読んで、道路から撮影するだけになった。

弘仁2年（811年）に、亀戸郷の鎮守として弘法大師により出現したと言われている。東向島白鬚

神社の氏子達によって祀られたという情報もある。祭神は級長津彦命(しなつひこのみこと)・津長井命(つながいのみこと)・岡象女命(みつはのめのみこと)の三神。級長津彦命は伊弉諾命と伊弉冉命の間に生まれた風の神、津長井命は井戸の神、岡象女命は水の神。

河口の砂州から生まれた亀島に人が住むようになり、811年には「亀戸郷」が存在していたと読み取れば、この神社は「亀戸」という地名のルーツを語る神社ということになる。

石器時代の石神をご神体として祀っていたことから石神社と言われていたのが石井神社という名に転じた背景には「石の井戸」つまり「亀島の井戸」が関係していて、石神井・石井などの地名の興りとも繋がっていると考えられる。

【東覚寺】

寶蓮寺を出て、明治通りの一本東側の路地を北に歩くと、二本目の路地に東覚寺がある。

享祿4年(1531年)開山、真言宗智山派法号山東覚寺。当初の本尊は不動明王だったが、明治34年(1901年)に覚王寺を合併したことにより大日如来に変わった。江戸時代には亀戸不動と呼ばれていた。寺に入るとすぐ右手に弁財天が建っており、亀戸七福神のひとつに数えられているとのこと。

大きな石灯籠の脇から北側にある小学校の校舎が見える。大きな校舎の壁面にある「香取小学校」の文字が鮮やかに読み取れる。この町は、その昔葛西御厨であった頃に、千葉の香取から来た人が開拓に入ったことから、香取神社があり地名等に「香取」が残ったとのこと。

明治通りの西側に亀戸香取神社があり、小村井には小村井香取神社がある。

【龍光寺】

亀戸駅から明治通りを北上すると、北十間川に架かる福神橋の南側(江東区側)の岸边にあるのが龍光寺。さほど大きくはないが、しっかりした佇まいの寺で、背後に建つ巨大なマンションにも決してひけをとらない風貌。正式名称は、真言宗智山派医王山龍光寺。

弘治2年(1556年)に僧元栄が横山町に創建し、後にこの地に移したと言われている。本尊は薬師如来であったが戦災で失い、多聞寺から十一面観音を譲り受けて本尊とした。

【亀戸香取神社】

龍光寺の南側に南北に長い参道を持つ亀戸香取神社が、明治通りに面して建っている。

天智天皇4年(665年)に藤原鎌足が東国下向の際この地(亀の島)に立ち寄り、香取神宮から分霊を勧請して、旅の安泰を祈願したのが始まりと言われている。

この時に亀戸香取神社と命名されたとすれば、亀戸という地名の歴史が、亀戸石井神社の項で触れた811年よりもさらに遡るものであることになる。

後の世で、天慶時代に平将門が乱を起こした際、俵藤太秀郷がこの社に参籠して戦勝を祈願した。その後の時代でも、世を動かした数々の武将・偉人・スポーツマンなどが祈願に訪れており、近頃では「スポーツの神」というキャッチフレーズが付くようになった。

ここから北へ 700mほど歩くと小村井香取神社があるが、由緒の説明が全く異なるのは不思議でもあり興味深くもある。

以上

(東武亀戸線の沿線を歩いて見る その2につづく)

